

様式2 令和3年度 清瀬市立清瀬第十小学校 学校評価計画						
学校教育目標			育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動			
・豊かに感じ、よく考える子ども ・友達の良さがわかり、助け合う子ども ・心身をきたえ、明るく生きていく			・育成を目指す資質や能力を「他者とのかわりを通して、よりよく問題を解決できる力(協働問題解決力)」とした。それに伴い実現のために必要な力を以下の4つとした。 ○基礎的な力(言語、数量、情報スキル)○他者と共に考える力(協働問題解決力、メタ認知) ○他者と共生できる力(人間関係形成力)○社会の中で実践する力(社会参画力、自律的活動力) 感染防止対策を進めながら、主体的・対話的で深い学びとなるよう、教員が学習内容や方法を工夫して授業展開していく必要がある。そこで校内研究及び教員同士の相互授業参観を通して全教員の指導力向上を図る。 ・「分かる楽しさ、できる喜びを味わえる授業づくり」を通して、育成すべき資質や能力の実現を図り、ICTの活用や養育体験を通した命の学習を特色ある教育活動として定め取り組む。			
目指す学校像(ビジョン)			【目指す学校像】①児童にとって明るく楽しく安心できる学校 ②教職員にとって明るく楽しく指導が行える学校 ③保護者や地域から信頼される学校 【目指す児童・生徒像】自分を大事に、かわりを大事に、今を大事に、未来を大事にする児童			
前年度までの学校経営上の成果と課題			成果 取組指標、成果指標それぞれが「4」と一番高かった項目は、確かな学力の向上として定めた「授業ではめあてや流れも明示することで分かりやすい授業を行う。」豊とかな心の育成として定めた「アセスやアンケートによるいじめの未然防止」であった。学校関係者評価でも信頼度は高く なっており、安全・安心な学校として教育活動が展開されている。 課題 取組指標が「3」成果指標が「1」と一番低かった項目は、特別支援教育の充実として定めた「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や環境の工夫・改善を行う。」であった。学習支援を必要とする児童のニーズを的確に捉え、その人数を増加させないことが課題である。			
柱	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	次年度以降の改善方策	
		評価	課題及び次年度以降の改善方策(案)	学校関係者による「自己評価」についての評価	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策	
確かな学力の向上	週の指導計画に学習のねらいや活動を記入し、授業ではめあてや流れも明示することで分かりやすい授業を行う。	4	4	成果 児童アンケートの「授業は、めあてを目指して楽しく取り組んでいる」や「授業中、友達との伝え合いの中で勉強が分かるようになったと思う」の項目で90%以上が肯定的な回答を示した。 方策 児童にとって深い学びとなるようさらなる授業改善を行う。	教員の雰囲気作りや指導方法が良いと思う。さらなる肯定率が上がるように継続していただきたい。 9%の否定的な児童にも目を向けることを忘れないでいただきたい。	個々の児童に目を向けて基礎・基本を大切にしたり分かりやすい授業を展開しながらも、児童にとって深い学びとなるよう、さらなる授業改善を行う。
	教員相互で授業参観の機会を作り、事後に協議を行わせて授業改善を図る。	4	4	課題 児童アンケートの「英語の授業は楽しく、好きだ」の項目で11%が否定的な回答を示した。 方策 保護者に授業公開することも意識しながら、児童にとって分かりやすく楽しい英語授業を実践していく。	全児童に楽しいと思ってもらうことは難しいが、苦手意識をもたないように指導していただきたい。 英語学習はコミュニケーションが重視されているので、積極的な関わりで苦手意識のある児童は、楽しいと感じにくい。	今後も校内研究では研究授業の授業者だけに任せるのではなく、教員一人一人が授業研究に取り組んで、相互に授業参観を行っていく。特に英語は感染状況が改善すれば保護者に授業公開することも意識し、児童にとって分かりやすく楽しい授業を実践していく。
豊かな心の育成	来校者や教職員、地域の人にするすんであいさつできるようあいさつ運動を取り入れて指導する。	3	3	課題 保護者アンケートから登校時の交通安全見守りの方々へのあいさつができていないことが分かった。 方策 あいさつ運動を継続するだけでなく、児童の心に響く指導を行い、主体的にあいさつできるようにする。	マスク生活で一時期あいさつが少なく感じたが昨年度よりあいさつできる児童が増えたと感じる。 あいさつの気持ちよさなどその意味が分かればもう少しあいさつ率が上昇すると思う。	あいさつ運動を継続するだけでなく、あいさつの気持ちよさなど挨拶の意味や価値を理解させ、児童の心に響く指導を行い、主体的にあいさつできるようにする。
	アンケート調査を定期的に実施する。いじめがあった際は、いじめ防止対策委員会等で適切に対応する。	4	4	成果 いじめを早期解決することができた。 方策 今後も触れ合い月間アンケート6・11・2月、児童の振り返りアンケート7・12月を実施したり、いじめ防止対策委員会を開いたりして、対応策を考え実行していく。	早期解決は喜ばしい。アンケートが形骸化しないようにしていただき、いじめに対する予防的なアプローチも必要である。 高学年はSNSによるいじめに注意が必要であり、家庭への啓発も必要である。	いじめの予兆に対して教職員で共通理解を図り、いじめの未然防止に努める。触れ合い月間アンケート6・11・2月、児童の振り返りアンケート7・12月を実施したり、いじめ防止対策委員会を開いたりして、いじめが起きた場合は、その対応策を考え実行していく。
健やかな体の育成	なわとびの出前授業の実施、学習カードの活用、教員の実技研修を行うことで指導の工夫改善を図る。	4	4	成果 外部講師を招聘し、1・2年生に縄跳び教室を行うことができた、またその指導方法も学ぶことができた。 方策 タブレットで動画も活用しながら継続的に体力向上に取り組んでいく。	タブレット動画という現代らしい工夫がとても良いと思う。 可能な限り続けていただきたい。児童も積極的に取り組んでいる。	外部講師の招聘に関しては、予算縮小という現実があるが、指導動画を活用しながら継続的に体力向上に取り組んでいく。
	「早寝・早起き・朝ごはん」の実践を様々な機会に働きかける。	4	4	成果 保護者、児童ともに、うがい・手洗い、早寝・早起きの意識は高まった。 方策 今後も保健便りで早寝・早起き・うがい・手洗いの大切さ、給食便りで朝ごはんを食べることの大切さを啓発していき、学級指導も合わせて継続していく。	保健だより、給食だより、学校だよりで家庭にも啓発されており、学校での取り組みも見やすい。家庭の協力、児童の自覚と習慣化が大事である。 この事項が良好なことは児童に取って心身充実からの学力向上などの良い恩恵が得られると思う。	保健だより、給食だより、学校だより、保護者会で家庭に啓発し、児童には学級指導を継続的にやっていく。
特別支援教育の充実	学年ごとの支援委員会を定期的に開催し、日々の学年会を活用しながら児童の実態や指導方法を共有し、実践の振り返りを行う。	4	4	成果 1学期アセスで要対人支援領域の児童9名全員が友人関係が良好であると感じるようになり、2学期には1人もいなくなった。 方策 再び要対人支援領域に戻らないよう、友人関係や日常生活において気を配る。	マスク生活で相手の表情がはっきりと見えないのでトラブルが増えるかと思ったが2学期の成果はすばらしい。 児童が幼少期に良い人間関係を構築できていれば、その児童に取って良い未来を描けるであろうし、学業に集中できると思う。	アセスを活用して要対人支援領域における児童の困り感を把握し、友人関係や日常生活において気を配りながら相談体制が取れるようにする。
	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や環境の工夫・改善を行う。	4	1	課題 1学期アセスで要学習支援領域に33名存在したが、残念ながら2学期も33名となり、学習の困り感をもつ児童の減少には至らなかった。 方策 アセスの児童個票をもとに学習のどこにつまずきがあるのか一人一人分析し、授業における指導方法を改善する。	コロナ禍の中で難しい側面があったかと思う。困難さに対して個々に応じた支援を図りつつ指導面、環境面を改善するのは難しいと思うが、工夫や手立てを具体的に示し細やかな指導や支援を継続的に行っていただきたい。	学習のどこにつまずきがあるのか一人一人分析し、授業における指導方法を改善する。ただコロナ禍の中で改善が難しい側面(対話的・体験的な活動の制限)もあるので、次年度の成果指標の基準を変更する。具体的には学習の困り感をもつ児童の数に増減がない場合は2とし、増加した場合は1とする。
本校の特色	蚕学習や石田波郷俳句作りへの参加、郷土カルタや百人一首の活用を充実させる。	4	4	成果 石田波郷俳句大会への投稿と運動させた授業改善を図り、児童の意欲を高めることができた。蚕学習はピュアシルクの全面協力を得て、命の大切さについて深く考える授業を行うことができた。 方策 本校の特色として継続し力を入れていく。	蚕学習はピュアシルクの皆さんのたゆまない努力のおかげで授業の質が保たれている。教員も同じビジョンを共有してくれているお陰で良い授業ができてくる。学校の特色として定着しているので可能な限り続けていただきたい。	本校の特色として定着している蚕学習、俳句作りは継続的にを行い、命の重みや伝統文化の大切さを指導していく。
	ICTを活用して、分かる楽しさ、できる喜びを実感させるための教材研究を充実させ、授業力を向上させる。	4	4	成果 児童アンケートの「タブレットを使った授業は楽しく、分かりやすい」の項目で90%以上が肯定的な回答を示した。 方策 ハイブリットオンライン授業に関してさらなる授業改善を押し進めていく。	2月からのオンライン授業で集中して取り組めているのは児童の順応性の高さと教員の工夫の結果だと思う。 低学年の児童から画面をずっと見ていると疲れるという声を聞いた。友達と会えない、外で遊べないという環境も続き児童の様子が心配な面もある。	ハイブリットオンライン授業に関してさらなる授業改善を押し進めていく。一方、目や頭の疲れ、視力低下といった課題も意識し、健康で安全な指導方法も模索していく。